井上靖

波濤
あした来る人

あした来る人　波濤

井上靖

新潮社版

あした来る人・波濤

〈井上靖小説全集7〉

昭和48年1月15日印刷
昭和48年1月20日発行

定価 650円

© Yasushi Inoue, 1973,
Printed in Japan.

著者 井上靖
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話
東京二六〇—一一一一 郵便番
号一六二 振替東京八〇八
印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

落丁・乱丁本はお取替え
いたします

目次

あした来る人　五
波濤　二八三
自作解題　四四〇

装画 加山又造

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井上靖小説全集　第7巻

あした来る人

リュックサック

列車が浜名湖の鉄橋にさしかかった時、曾根二郎は、後尾に近い三等車の一隅から腰を上げた。食堂車へ行くためである。通路に立つと、彼は合外套のボタンを外し、両手でズボンをずり上げながら、はみ出しているワイシャツをズボンの中に押し込み、それから大きい伸びを一つした。

長崎県の大村湾に沿った小さな漁村を出発したのは昨日の朝である。それから三十時間近く乗り物に乗りづめである。上半身が一枚の板のようになっているのもさして無理ではない。

浜名湖の湖面には春の陽が散っているが、湖面の色も、湖の流れ方も寒々としている。まだ冬の感じである。湖面の海への切り口に、白い波濤が、これも冷たく砕けている。

曾根二郎はちょっと考える風にしていたが、網棚の方へ手を伸ばして、重そうなリュックサックを降ろすと、それを肩にかけて歩き出そうとした。

「お降りなんですか」

声をかけたのは席がなくて通路に立っている中年の洋服の男である。彼は、曾根二郎が次の浜松の駅ででも降りると思ったらしい。それもそのはずである。彼の立った後には、彼の持物は一物も残っていない。外套は着ているし、リュックは肩にしている。

「いいや、食堂へ行くんです」

そう言ってから気付いたように、

「かけていて下さい。構いませんよ。ぼくの居ない間、どうぞ、おかけ下さい。大変ですな、旅は……」

曾根二郎は笑い顔を作った。その笑い顔がひどく人なつっこかった。彼は数え年で三十八歳だが、笑うか、口をきくかしないと、正確な年齢は現われない。黙っていると、その律儀で素朴な感じの顔はひどく老けてみえる。四十二、三と言っても通りそうだ。曾根が歩き出すと、その周囲の四、五人の乗客の眼はいっせいに彼の背に注がれた。何となく周囲の人の視線を集めても、いっこうさしつかえないような多少とぼけた感じのものを、彼は身体のどこかにつけている。

曾根はぎっしり詰って重そうなリュックを、右肩を少し上げて背負い、車の動揺に時々身体をふらつかせながら、幾つもの車輛を通り抜けて行った。

食堂車には客が八分通り詰っていた。曾根は入口でゆっくりと内部を見渡した。そして空いている三つの席の中で、若い婦人客の前の席を選択した。窓際の二人むき合って腰かける席である。ただで美人の顔をながめられることに曾根二郎は満足だった。

その席へ行くと、彼はリュックを椅子の横に置き、メニューを取り上げた。

「酒！　二本」

壜詰一本で決して自分が満足しないことを彼はよく知っている。酒が運ばれて来ると、トンカツを頼んだ。脂っこいものが好きである。曾根は何年か振りで見る東海道の風景と、前に坐っている麗人を観賞しながら酒を飲もうと思った。

曾根は、壜詰の酒を、それについて来たガラスの小さいコップにあけて、それをぐびりと、口の中にほうりこむような特徴のある飲み方で飲みだした。口の中へ一度に多量ほうりこむが、しかし、口にコップを運ぶ回数はそうひんぱんではない。飲み下すと、あとはちょっと下唇で上唇をなめ、ゆうゆう迫らぬ表情をして、視線を窓外に投げている。

そして時々は視線をむかい合っている女性に向ける。美人である。——と言って、美人だと判定を下したのは食堂車にはいって来て、入口で一瞥した際のことで、むかい合って坐ってからは、相手の顔へは一度も視線を投げていない。もともと若い女性の顔を見ることは、曾根二郎の苦手とするところである。

フォークとナイフを動かしている白い手と、格好のいい胸を包んでいる水色のスーツが、視野にはいると、曾根は身体を快適な情感が伝わって行くのを感ずる。これだけで充分である。どうせただだから、これ以上のものを望みはしない。

美人もいいが、窓外の景色もいい。列車は浜松駅を出て、海に近い田んぼの中を走っている。黄色い菜の花は三分咲きである。大根の畑と、三寸ほど伸びた麦畑とが、交替に眼にはいって来る。五年間九州の田舎で暮したが、その間に一度も上京していない。久しぶりの東海道の風景である。

「やがて、富士が見えて来ますな」

曾根二郎は、思わず口に出して言った。本当に彼は先刻から久しぶりで富士の姿を見るのを楽しみにしているのである。

向う側でフォークを動かしていた手が止まった。が、応

答はなかった。紅貝のような色をしたみがかれた爪が、きゅうっとそこに力を集めた感じでフォークを押えている。と、それはやがてまた動き出した。

「酒を、もう一本」

曾根二郎は振り返って、給仕の少女に命じた。

彼は酒を口に放り込むのも早かったが、料理を平らげるのも早かった。静岡駅近くなった時、卓の上に三本の空壜が並んだ。赤い爪はコーヒー茶碗を口に運んでいる。

曾根二郎は腰を上げた。もう少し飲みたかったが、倹約したのである。彼は机の端にコショウ壜で押えてあった伝票をつかむと、リュックを肩にしてカウンタアの方へ行った。きっかり三百円支払った。

アルコールの酔いも快適だったが、勘定の廉いことも快適だった。車輛を三つか四つつっ切って、後尾の車輛の自分の席にもどって来ると、リュックを網棚の上に載せた。彼の留守の間、彼の席に替って坐っていた人物が立ち上がった。その時、曾根二郎は、

「いいんです。そのまま腰かけていて下さい」

言うなり、今上げたばかりのリュックを網棚から降ろし、また食堂車へ引き返し出した。伝票を間違ったに違いないと思いついたからである。酒三本とトンカツで三百円は廉すぎる！

伝票を間違えたとすると、相手は自分にむかい合って坐っていた女性である。彼女は三百円の料理を食べて、五百円近く支払ったかも知れない。彼女は恐らく二等の乗客であろうから、探すにしても、たいしたことはないと曾根は思った。

彼はまたリュックを背負って、幾つかの車輛をつっ切った。食堂車には、もちろん、さっきの若い女性の姿はなかった。そこを抜けて特二の車室にはいると、曾根は左右に視線を投げながら、麗人の姿を探して行った。

三等車に比べると、室の雰囲気がゆったりしている。立っている乗客は一人もない。みんな申し合せたように椅子を背後に倒して、眼をつむっている。曾根二郎には、二等の客がみんな、食後の満ち足りたうたたねをしているように見えた。

二つ目の特二の室へはいった。そしてその中程まで行った時、そおれ、つかまえた！　口には出さなかったが、そんな気持だった。

彼女に違いなかった。二つ並んでいる席の通路側の方を取って、同じように身体を背後にもたせて、軽く眼をつむっている。曾根にはその女性だけが、食後のうたたねの感じには見えず、瞑想しているかのように見えた。

「もし」

声をかけたが、彼女は眼をあかなかった。
「ちょっとおたずねしますが——」
「は？」
驚いたように眼を開けると、身を起した。きれいな顔をして驚きゃあがる！　曾根二郎は思った。
「先程は食堂で失礼しました。あわてて伝票を間違えやしなかったかと思うんです」
「は」
肯定とも否定とも受取れるあいまいな返事だった。
「ぼくは酒三本とトンカツを食べて三百円払いました。その時は廉いなと思って払ったんですが、あとで考えてみると、どうも、貴女の伝票ととっかえたのではないかと思うんです」
「は、あの——」
また彼女はあいまいに言った。年のころは三十ぐらい。美貌にも美貌だが、総体に上等の出来である。
「確か貴女は目玉か何か食べていましたな。それから何ですか、あれはビフテキですか」
「あの、よろしいんですの」
「よろしくはありません。幾らお払いになりました」
「でも、あの——」
ひどく小さい声で、相手は言った。自分も声を低くするから、曾根にも声を低くしてもらいたいといった表情だった。大きい黒い眼がぬれているようである。曾根二郎は、その眼をのぞき込んだ。網棚の一部がその黒い小さいレンズにくっきりと映りでもしているようである。
曾根二郎は彼の生命から二番目に大切なリュックを通路に置いた。それを見ると、相手は、
「伝票が間違っていたのは存じておりました。でも、たいした違いではありませんでしたので、そのまま払いました」
と言った。到底釈放されそうもなかったので、ありのままに言ってしまおうといった面持ちだった。
「そうでしょう」
曾根は言って、
「幾らお払いになりました」
「四百二十円でしたかしら」
「そりゃあ、災難でしたね」
曾根は外套のポケットから、むき出しのままはいっている紙幣と小銭をつかみ出すと、差額の百二十円を相手に渡した。
「よろしいんですのに——、すみませんでした」
「すまないのは、こっちです。ぼくの方が間違えたのですからね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それから曾根は、通路をはさんで、婦人と隣り合っている席にだれもかけていないのを見ると、
「ここ空いていますか？」
ときいた。またリュックをかついで、もとの後尾の車輛に引返すのにうんざりしたからである。
「空いております」
「じゃあ、ここへかわりましょう」
なんといっても二等車の方が快適だったし、もう東京まであと三時間足らずである。料金を支払うにしてもたいしたことはないと思った。曾根はリュックを網棚の上に載せると、立ったまま煙草をポケットから取り出してくわえた。
座席へ腰を降ろして大分経ってからだった。
「あの、お荷物を持っていらっしゃらなくてよろしいんですか」
婦人が声をかけてきた。曾根があまりゆうゆうとしているので、心配になったのかも知れない。
「向うには何も置いてないんです。リュックは持って来てありますからね」
曾根が笑うと、同時にくすりと相手も笑った。
「おかしいですか」
「いいえ、でも——」
それから婦人は、また軽い笑い声を出した。が、すぐそのあとで、失礼と思ったのか、
「リュックサックを大切そうに持ち歩いていらっしゃるから」
こんどは、おおっぴらに笑った。ひどく素直な感じだった。曾根二郎は苦笑して、
「大切そうにと言いますが、大切なんですよ。実際！」
その曾根の言葉が強く聞えたのか、
「あら」
多少とまどった様子だったが、曾根はもう婦人の方を見なかった。
富士の山頂の一部が雲の間から見えている。ほんの少し見える青い空を背景に、雪におおわれた山頂の一部が、眼にしみるようにくっきりと浮び出ている。隣りの麗人より富士の方がずっと美しい。やがて曾根は椅子の傾きを調節するボタンを発見すると、身体を背後にもたせた。曾根二郎は他の人のように眠りにははいらなかった。網棚のリュックが気になっていたからである。
列車は六時二十五分に東京駅に着いた。曾根二郎は三十時間の乗り物の旅から解放されて東京駅のプラットホームに降り立った。
さすがに身体は疲れている。リュックサックの重みが、ずっしりと肩にくいこんでいる。どこを見ても人間が多い。

こんなに多くの人間が一体ここで毎日何をしているのか。入れかわり立ちかわりはいって来る電車が、次々に人々をのみこみ、人々を吐き出している。しばらく来なかった間に、東京というところは人間がやけに沢山集まった感じである。

曾根はホームをつっ切り、階段を降り、降車口から駅前の広場へ出る。ここも人である。人のほかにおびただしく自動車が密集している。曾根は、しかし、五年ぶりの東京の玄関口の雑踏に押されたわけでない。気おくれする何ものもありはしない。蟻のようにしか見えない人間というものが、東京というところでは、少し哀れに思えただけのことである。

地下道をくぐって地上へ出ると、曾根二郎は丸ビルの建物を見上げ、ビルの中央入口の横手のガラス箱のような喫茶店へはいって行った。

どの席も満員である。つっ立っているうちに、出入りする何人かの人間が、曾根のリュックにぶつかった。この分では空席を占領するのは容易なことでないなと思った。そして、曾根はこうした場所を指定して来た旧友山田喬に軽い反感を覚えた。

「おい、ソニャアン」

急に横合から昔のよび名で呼ばれた。

「なんだ、居たのか」

曾根はふり返った。

「すげえ格好して来たもんだね」

山田喬は、曾根の背の大きなリュックに眼をつけると、最初にこう言った。

「まるで、金鉱でも発見に行くみたいじゃあないか」

「金鉱の発見に違いないんだよ。金をこの東京からひっぱり出しに来たんだ」

曾根二郎は大きな声で言った。

「もっと小さい声で話せよ」

山田はたしなめて、

「あそこへ行こう、あそこがあいた」

するすると、人の間をすり抜けて、器用に窓際の席を取った山田の敏捷さに、曾根は小さい驚きを感じた。

曾根はリュックを降ろすと足許に置いた。コーヒーが二つ卓に並ぶと、

「すぐこれから宿へ案内するよ。のんきなのとやすいのが取柄だ。めったに君の言って来たような値段のところはないよ」

「結構」

「一体何日ぐらい居るつもりなんだ」

「さあ、出版の交渉と金を集めに来たんだからな」

「金って？」
「出版費用とこれからの研究費の一部がほしい」
「どこからもらうんだ」
「あてはないがね」
「ソニャアンらしいな」
山田喬は、また昔のよび方で曾根二郎をよんだ。
「研究って、一体何の研究をしているの」
「カジカという魚だよ」
曾根二郎は、この時だけ静かに言った。

山田喬が世話してくれた神田の大学近くの、下宿兼旅館といった格好の宿所に落ちついたのは七時半だった。
曾根と山田とは高等学校時代、寮で一緒だった仲である。曾根は大学は農学部の水産科へ行き、山田は医学部に進んだので、それ以来親しいつきあいはなく、お互いにどんな生活をしているか知らない。ただ、たまたまこの友の住所を知ったので、曾根はこんどの上京に当って、東京滞在中の宿の世話を頼んだのである。
薄暗くて、壁もひどく汚れている。なんとなく三流どこの病院の病室に似ている。
「よくこんなところがあったものだな」
曾根が感心すると、
「だって、君の言って来た条件ではこんなところしかないよ。知っている学生がここに居るんだ」
山田喬は、現在公立の病院に勤めていて、さして裕福でもなさそうだが、といって、不自由な生活をしているわけでもなさそうであった。なかなかしゃれた服を着ている。曾根はそう思ったが、曾根に比べれば、世の中の人間はみんなしゃれた服装をしていることになる。
「ずいぶん久しぶりだな。何年になる」
山田は言った。
「さあ？——とにかく今夜はゆっくり話そうや。酒でも飲みながら——」
言いかけると、
「今日は失礼する」
きっぱりと昔の友達は言った。
「あいにく夜勤でだめなんだ」
「夜勤なんて休めよ」
「そうはいかない」
「明日は？」
「明日か、実は明日から当分出張なんだ。とにかく、そのうちに改めてゆっくりやって来るよ」
山田喬はまた来る、また来るを連発して、落ちつかない態度で帰って行った。

山田が帰ってから、曾根は宿の女中の運んで来た食膳に向った。魚の煮つけがあったが、大村湾の生きのいい魚を食べつけている曾根には、ひどく味が落ちて感じられた。それでも曾根は酒を一本つけてもらった。

曾根二郎は、昔の友達が自分を敬遠したことに感づいていた。しかし、敬遠されたことを憤慨してはならぬと思った。とにかく東京でのねぐらを、彼は、おれのために発見してくれたのだからな！　これもやはり友達の有難さというものだ！

曾根は早く床に就いた。疲れていたのでよく眠った。夜半に一度眼を覚ました。カーテンのない窓が、火事のように赤くなっている。彼は立ち上がって窓から戸外を見た。安酒場のネオンが、窓のすぐ向うでただれたような赤い光を夜空ににじませていた。

翌日九時に、曾根二郎は神田の旅館とも下宿ともつかぬ宿の一部屋で眼を覚ました。十二分に眠ったので、長い旅の疲れはすっかり回復している。

曾根は朝食をすますと、リュックサックから、ワイシャツ、靴下、ハンカチ、はだ着類などを取り出して、それを風呂敷に包んで部屋のすみの小さい机の上に置いた。それから手回り品のこまごましたものをも取り出し、これも机の上にきちんと並べた。こうしたところは、見かけによらずきれい好きである。

それから曾根は残りのリュックの内容物を全部取り出して、それを詰め直すために畳の上に拡げた。茶色の大きな四角な封筒に入れた原稿が三包み、全部では何百枚になるか厖大なものである。横文字の書物が五、六冊とパンフレットが一束。それから変てこな形をした大小の魚の写真や図版が、これも幾束にも束ねられてある。あとは堅いボール箱が五個。これにはぎっしりと顕微鏡のプレパラートが詰っている。

曾根はそれらの品を改めてリュックに詰め直した。リュックは、先刻にくらべるとその容積を三分の二に縮めたが、しかし、持ちあげてみると、相当の重さである。——大学を卒業してから今日まで十四年間の、曾根二郎の生きて来た記録の重さである。

曾根二郎は、そのリュックを肩にして、正午少し前に宿を出た。

曾根の訪ねて行った先は、虎ノ門の近くの小さいビルに編集室を持っている特殊な学術出版で知られている東洋出版社である。

曾根は、そこで生物学者の神谷高彦に会った。学者というよりジャアナリストといった方が通用する人物で、この

出版社の顧問をしている。
「お仕事は、大体お手紙で承知していますが、しかし、出版はまず難しいですな」
神谷は最初からはっきりと言った。無表情な物の言い方が冷酷な感じだった。
「一体、カジカという魚は、何種類ぐらいあるんです」
「七十四種類です」
「みんな研究されたんですか」
「一応はみんなやりました」
「ライフ・ヒストリー（生活史）ですな」
「そうです」
曾根二郎がリュックの紐を解きかかると、神谷は、それを拡げられては大変と思ったのか、
「いや、結構です。いいんです」
と制して、
「カジカ！　それにしても、また妙な魚をやったものですな。余り人間の生活と関係がない」
「見たことありませんか」
曾根は素直にきいた。
「ありませんね」
曾根はまたリュックを解き出した。
「いいんです」
「いや、見るだけ見て下さい」
曾根は数十葉の写真を取り出して、机の上に置いた。
「みんなカジカですか」
「そうです」
どの写真にも、頭の大きいすこぶる不器量な魚が大写しになっている。大小、形状の差異はあれ、不器量なことだけは、みんな共通している。
「不細工な魚ですな」
出版社の顧問である生物学者は言った。専攻が違うので、正当な理解は期待していなかったが、相手に最初からこの研究に熱意のないことが、曾根にも感じられた。
「でも、多年研究していると、可愛いものですよ」
「そりゃあ、そうでしょう」
「人間の方に、もっと不器量なのが多いです」
神谷高彦は顔を上げて、ちょっと曾根の方を見た。自分のことでも言われたと思ったのかも知れない。
「こうした研究でも、大学方面からの推薦でもありますとね。——白根博士は御存じありませんか」
「白根さんはぼくの先生です。——でも、苦手ですな、あの人物は」
白根博士は水産学界では第一人者である。大学の時曾根は一回落第したが、それはこの教授のおかげである。お覚

えめでたかろうはずはない。
大学を出てから十年近く曾根は北海道初め各地の水産試験所に勤め、それから終戦後、資源科学研究所という私立研究機関に転じたが、その間博士には、賀状一本、暑中見舞一本出していない。半分は生れつきのずぼらさからであったが、半分はカジカの研究に没頭して、本当のところ、博士のことなど一度も思い出したことはなかったのだ。といって、学者として、人格者として、白根博士を尊敬している点では、曾根は敢て人後に落ちないつもりでいる。
「白根博士がだめなら、だれかお勤め先の方で——」
神谷は言ったが、こっちはもっと悪い。研究所に籍をおいて、そこから月給はもらっているが、すこぶる月給どろぼうの感が強い。五年間も大村湾に駐在して、勝手にカジカの研究に没頭させてもらっている。私立研究所にしても、わがままの許される限度というものがあるが、曾根の場合は、どうやらその限界をこえているらしい。
「こっちはもっと苦手ですな」
曾根は言った。
「出版して、論文でも提出しない限り、白根さんにも、研究所の先輩にも、どうも、推薦してくれとはいえませんよ」
それから曾根は笑った。その笑いには暗いところはなかった。
「もし出版するところがあるにしても、自費出版ですな」
「もちろん、そうです」
「相当かかりますよ。——四、五十万」
相手はきめつけたつもりらしかったが、
「そう、百万円はかかりましょう」
曾根の方はこたえなかった。出版をことわられた腹いせではなかった。
「後援者がありますか」
「いまはありません。でも、出版を引き受けてくれるところがあれば、金は集まると思うんです」
本当に、曾根はそう考えていた。進化論に多少訂正を要する主張が、研究にははいっている！ この相手には判らぬひそかな思いが、この時、曾根二郎を少し意欲的にした。こうした時、いつもそうであるように、その人のいい顔の中で、二つの眼がちょっと青く光って見えた。
「失礼しましょう」
曾根は立ち上がった。
曾根二郎が上京してから一週間経った。この間に彼は東洋出版社を皮切りに、何軒かの出版社を訪ねたり、相当名を知られている学者に会ったりしたりした。一週間リュッ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com